香港の大学図書館の動向

大学図書館利用サービス課総合主管　魚住　英子

筆者は、2014 年 11 月 24 日から 29 日までの 6 日間、私立大学図書館協会国際図書館協力委員会が募集した海外集合研修に参加して、香港の大学図書館 4 館を訪問した。訪問先では、図書館見学はもちろん、事前に図書館業務に関する質問として送った事項について、担当するライブラリアンから講義を聴いてディスカッションをする機会も多数あり、非常に有意義な研修となった。その成果は、筆者を含む研修参加者 3 名の共同執筆による報告書として、私立大学図書館協会のホームページで公開されている[1]。また、2015 年 8 月末に開催された第 76 回私立大学図書館協会総会・研究大会にて口頭発表を行った[2]。

ここでは、筆者が香港の大学図書館で見聞した多くのことから、蔵書構築におけるトレンド、学修支援の取組み、そして香港の大学図書館間協力の現状の 3 項目を紹介したい。

1. 香港の大学および大学図書館事情

筆者たちが香港を訪問した 2014 年秋には、香港の動向が日本の新聞やニュースで頻繁に報じられていた。香港特別行政区の行政長官選挙をめぐる中華人民共和国政府の方針に反発したデモ隊は、同年 9 月末から香港中心部を占拠して抗議行動を展開していた。「雨傘革命」と呼ばれるこの大規模な抗議行動は、大学生が中心で、暴力に訴えなかったのが特徴である。11 月末にはかなり沈静化していて、大学では普通に講義が行われていたが、訪問した 4 大学のあちこちで「我要真普選」というスローガンが描かれた横断幕やポスター、支援物資の山を見かけた（図 1）。



図 1　複数のキャンパス内で見かけたデモを支持する横断幕や支援物資

香港は 1997 年にイギリスから中国に返還されたが、それまでの長いイギリス植民地時代の名残で、現在も英語は中国語とともに公用語である。また、特別行政区として行政や司法などで独自性を保っており、中国本国とは異なる資本主義経済活動が継続していて、通貨も植民地時代から変更されていない。

このような香港では、香港政府の認可および資金援助を受けている公立の大学が 8 校あり、香港大（HKU）が 2015/16 の英国 Times Higher Education の世界大学ランキングで 44 位、香港科技大（HKUST）が 59 位に入るなど、全般的に研究・教育水準は高い[3]。しかし意外なことに、香港大と香港中文大（CUHK）以外の 6 校は、大学への昇格あるいは創立自体が 1980 年代以降と歴史は新しい。また、ごく最近に香港の教育制度が大きく変更されて、大学課程はそれまでの 3 年（中等教育のあとに大学予備課程が存在していたため）から 4 年制となり、2012 年秋にどの大学でも学生数が約 30%増加した。

筆者たちは、公立大 8 校の内、香港大、香港理工大（PolyU）、香港城市大（CityU）、そして香港科技大の 4 大学の図書館を訪問した（図 2）。これらの大学では、一部の講義を除き、教養科目も専門科目もすべて英語で講



図 2　香港における公立 8 大学の所在地（左下は空港）

義が行われ、学生が提出する課題などもすべて英語である。そのため、図書館も英語の文献やデータベースを主に購入・契約している。また、図書館内のサイン、ホームページを含めた広報物、e-learning 教材などはすべて英語表記になっている。図書館に勤務しているフルタイムの職員は、英米加の大学院での図書館学の修士号以上の学位を持つ専門職としてのライブラリアンと、補助的・定型的業務を担当するアシスタントとで、明確に職務や待遇が分かれている。そして、パートタイムのスタッフや学生アルバイトも含めてすべて直接雇用である。そのため、日本の大学図書館界ではもはや珍しくない外部業者への業務委託や人材派遣は、4 館ともに導入していない。

2. 蔵書構築におけるトレンド

先述のとおり、2012 年秋から学生が大幅に増加したため、4 大学ともに既存の図書館内に多くの学生用の閲覧座席を設ける必要性に迫られた。そこで、電子ジャーナルが普及したために利用されなくなった製本雑誌などを書庫に移すか除籍したうえで、それらが配架されていた書架を撤去して、閲覧・学習エリアを拡充するなどのリノベーションを行った。その結果、どの図書館でも、館内の一等地はラーニング・コモンズのようなアクティブ・ラーニングが可能なスペースとなり、冊子体の図書や雑誌はアクセスが不便なエリアに追いやられている。香港の大学では、米国などと同様に、図書館は物理的に図書や雑誌を利用する場所という機能がもはや主流ではなくなったような印象を受けた。

この筆者の印象は、各図書館で収書方針の説明を聞いて確信に変わった。どの図書館でも “E-preferred” という方針を打ち出し、電子資料の収集を優先しているのである。図書資料費の予算配分において、香港大、理工大、城市大の 3 図書館で、電子ジャーナルや電子ブックの購読に約 8 割を割り当てていて、冊子体の図書や雑誌の購入費は全体の 2 割程度に抑えられている。さらに顕著な例では、理工系分野と経営学に特化した科技大においては、データベースを含めた電子資料と冊子体資料の予算配分比は実に 9 : 1 である。同館では 2013/14 予算年度における図書資料費総額に占める冊子体の図書購入に充てる予算はわずか 6.9% にしか過ぎなかった（図 3）。参考までに、科技大（学生数約 13,500 人）の図書館における 2015 年 10 月段階での冊子体図書の蔵書数は約 724,000 冊で、電子ブックは約 292,000 タイトル、電子ジャーナルは約 43,000 タイトルである[4]。このように “E-preferred” を推進できるのも、どの図書館も電子出版が進んでいる英語資料が収書の主対象であるためと言えよう。一方、関西学院大学図書館で



香港科技大図書館の “E-preferred” の収書方針について、担当のライブラリアンから説明を受ける

図書	電子ブック	11.6%
	冊子	6.9%
雑誌	電子ジャーナルのみ	57.4%
	電子＋冊子併用	0.5%
	冊子のみ	1.3%
データベース		19.8%
AVなどの他のメディア資料		2.5%
合計		100.0%

香港科技大における2013/14年の図書資料費予算の資料種別配分

図 3　香港科技大学図書館での講義（表はスライドに投影された数字を基に筆者が作成）

は、日本の出版事情もあって、まだまだ冊子体の日本語図書や雑誌が収書の中心である。ちなみに、当館の予算配分では、電子資料と冊子体資料の比は 6 : 4 程度となっている。

蔵書構築の方針が電子資料優先というだけでなく、電子ブックの選書手段もオンライン主体である。具体的に電子資料の購読について話を聞いた理工大と科技大では、Patron-driven Acquisition（PDA）あるいは Demand-driven Acquisition（DDA）と呼ばれる電子ブックの選書システムを導入している。このシステムは、すでに米国の大学図書館では一般的で、各図書館の選書基準にあてはまる電子ブックの大量の書誌データを出版社が無料で提供して、その図書館のディスカバリー・サービスや OPAC で検索できるようにし、利用者は検索して表示された書誌データから電子ブックの目次や本文を閲覧できる。その利用実績に応じて、図書館はそのタイトルを購入するしくみである[5]。科技大では、異なるベンダーが提供する 3 種類の PDA のシステムを 2012 年秋から順次導入したところ、電子ブックのアクセス件数が急激に増加するようになった。また、利用者が求める電子ブックを購入することができるようになったことで、限られた資料費の有効利用につながっている[6]。

電子ブックは物理的に書架に並んでいないため、利用者にどのようにその存在を知らしめるかは難しい課題である。OPAC やディスカバリー・サービスの検索結果から本文へのリンクを整備するのはもちろんのこと、「こんな本がオンラインで読むことができる」と広報も行っている。例えば、城市大では、図書館入口付近の壁面に設置されたデジタルサイネージで電子ブックの新刊案内を表示していた（図 4）。また、科技大では、図書館ホームページ上の “Collection Highlights” というセクションで、ライブラリアンたちが毎月テーマを決めて、そのテーマに関する冊子体図書と電子ブックなどを短い書評をつけて紹介したり、新着情報を “Readers Alert” として月 2 回程度全教職員と学生にメールで配信したりしている。



図 4　香港城市大学図書館では広報手段としてデジタルサイネージを活用

3. 学修支援の取組み

筆者たちが訪問した 4 大学図書館ではどこも、ラーニング・コモンズか同様の機能を持つエリアが直近 3 年以内に設置、あるいは整備されている。

例えば香港大では、既存の中央図書館の 3 階すべてを “Level 3” という名称のラーニング・コモンズに改修した。そこには、Technology Zone, Collaboration Zone, Study Zone, Breakout Zone, Multi-purpose Zone の 5 つのセクションがあり（図 5）、個別学習からグループでのディスカッション、IT 機材や各種ソフトウェアを用いたプロジェクト課題まで、あらゆる学修スタイルに対応した機器と設備を備えている（図 6）[7]。“Level 3” 内に設置された数多くのパソコンやグループ閲覧室、キャレルはすべてスマートフォンやパソコンから予約可能で、空き状況が表示されたモニターも設置されていた。また、中央部に配置された Information Desk では、担当のライブラリアンやアシスタントが、レファレンスサービスや IT サポート、個別の研究支援などのきめ細かい対応をしている。筆者たちがこの “Level 3” を訪問

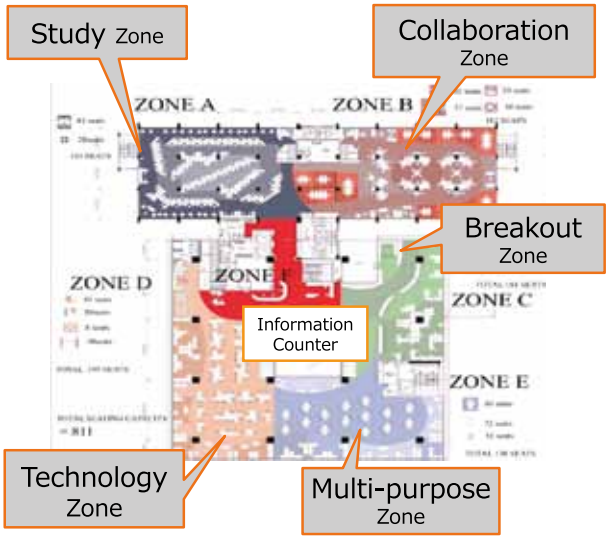


図 5　香港大学図書館内のラーニング・コモンズ Level 3 のゾーン配置



図 6　Level 3 各ゾーン

したときには、多くの学生で混み合っていて、個別あるいはグループで熱心に勉学に励んでいる様子が見られた。なお、香港大では、図書館外にも別部署が管轄している大きなラーニング・コモンズがあり、さらに Student Lounge という学生が自習などで利用できる小部屋が学内の至る所に点在しているとのことである。

香港科技大でも、図書館内にラーニング・コモンズを設置して、そのエリアだけは学期期間中 24 時間開室して学生のニーズに対応している。香港大の“Level 3”と同様のゾーンや機能を備えただけでなく、中に Creative Media Zone というテレビスタジオや AV 編集室、簡易製本やポスター印刷などができる機器類が設置された Graphic Workshop を備えたゾーンがある（図 7）。図書館内であるにもかかわ



図 7　香港科技大学図書館内のラーニング・コモンズの各ゾーン

らず、学部・研究科やキャリアセンターなどの他部署がラーニング・コモンズの施設を利用して、学生向けのさまざまなサービスやプログラムを提供している。

施設・設備だけでなく、どの図書館でも対面型・非対面型両方の学修支援に積極的に取り組んでいる。対面型としては、ライブラリアンが実施する情報リテラシー教育やワークショップが挙げられる。授業と連携したもの、個人で自由に参加できるものなど数多く提供され、大学院生向けのプログラムも充実している。4 大学図書館に共通して、剽窃の防止や正しい引用ルールを教えることを重視していると聞いた。一方、非対面型としては、数多くのオンラインチュートリアルや e-learning 教材を自前で作成して、図書館のホームページや YouTube（科技大）で提供している。さらに、各学部や専門分野に特化した学術情報の探し方などを案内したリサーチガイドも併せてホームページ上に用意している。また、4 大学中 3 大学で、WhatsApp と呼ばれる、SNS で気軽にライブラリアンに質問や相談ができるアプリを導入していた。

最後になるが、学修支援の取組みで非常にユニークだと感じた香港理工大の READ@PolyU というプログラムを紹介したい。これは 2011 年にスタートした学部新入生を対象としたプログラムで、「（共通の本を読むことで、）新しい環境において新入生同士で共通の経験をシェアし、コミュニティ形成の感覚を育むとともに、大学でのアカデミックな生活への導入となる[8]」ことを目的として、図書館と English Language Centre が中心となって実施している。筆者たちが訪問した年は、*The Boy in the Striped Pyjamas* というユダヤ人迫害をテーマにした小説が指定図書に選ばれて、新入生の希望者に無料配布された。その後、その指定図書に関連する様々なイベントが 1 年間を通して実施された。具体的には、ディスカッションセッション、指定図書に関する展示やセミナーの開催、ホロコースト映画の上映、著者とのトークセッション、ライティング指導のワークショップが順を追って開催され、新入生が応募するエッセイコンテストで締めくくられた（図 8）。優勝者には iPad が贈られたとのことである。このプログラムは理工大の全学的な協力の下で実施されていて、企業からの寄付もあり、指定図書 3000 冊を購入して無料配布することが可能となっている。まだ歴史は浅いが、図書館を中心とした関係部署の努力

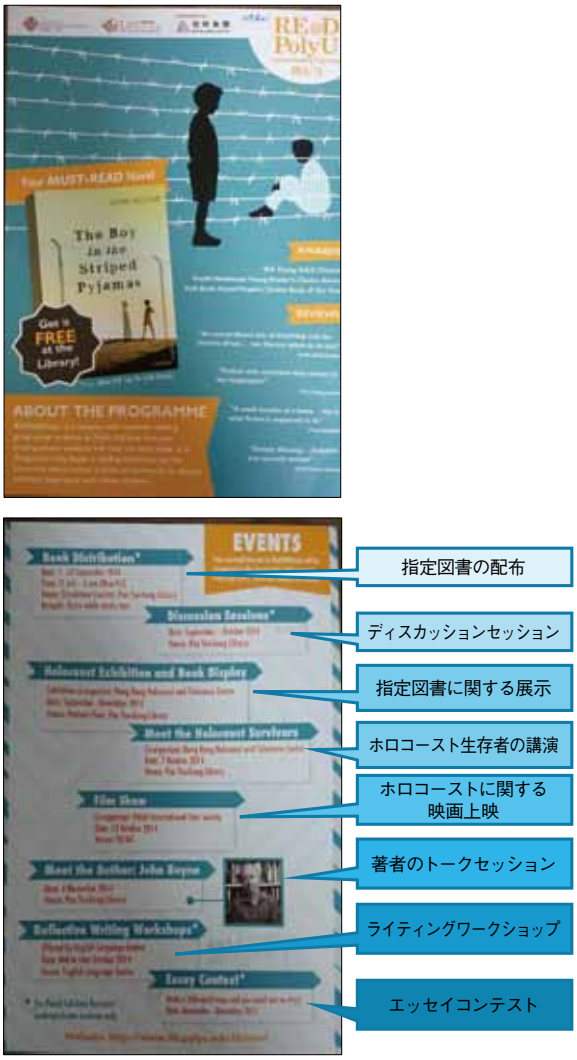


図8　香港理工大学図書館のイベントREAD@PolyUの広報チラシ(表・裏)

により、現在では理工大の新入生の約80%が参加する人気プログラムになっている。論文やエッセイのコンテストを図書館が主催するのは珍しいことではないが、そこに至るまでの数々のイベントの実施や、新入生にライティング指導まで提供する姿勢は先進的である。

4. 香港の大学図書館間協力

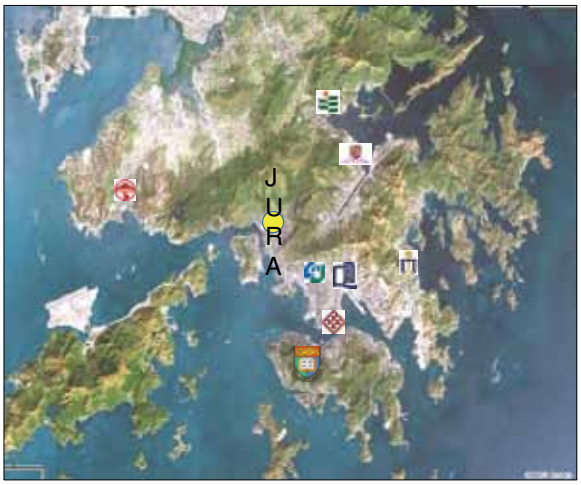
筆者たちが訪問した4大学を含む、香港政府の資金援助を受けた8大学の図書館は、JULAC (Joint University Librarians Advisory Committee) という図書館協力組織を結成して、積極的に活動している。現在JULACでは12の委員会が設置されていて、ライブラリアンやスタッフの研修、図書館協同システムの構築、著作権やメディアへの対応、資料の共同利用など多岐にわたり協力関係にある[9]。その中で、図書館の資料に関しては、3つの柱―「資料の構築」、「資料の共有」、そして「資料の保管」で協力を推進している。

まず「資料の構築」に関する活動としては、12の委員会のひとつである“Consorti*all*”で、電子資料やデータベースなどの購読においてコンソーシアムを結成して、出版社や流通業者との契約条件や価格の交渉を行っていることが挙げられる。コンソーシアムにはJULAC加盟館以外の小規模なカレッジやマカオの教育機関にも参加を促している。先述のとおり、香港の大学図書館は英語資料が中心かつ“E-preferred”の方針であるため、電子資料を中心とした資料構築のための活動を推進している。

次に「資料の共有」として、図書館間相互利用をさらに



JURA完成予想図



JURAの建築予定地は8大学のほぼ中間

図9　JULAC 8大学の共同書庫JURAの建設計画

発展させた活動を展開している。加盟8大学の構成員の希望者にJULAC共通のライブラリーカードを発行して、それを持参すれば他大学の図書館に自由に入館し、閲覧や館外貸出ができる。また、HKALLというオンライン共同目録システムを構築・公開して、どこにどのような資料が所蔵されているかをワンストップで検索可能なサービスを提供している。教員や学生はHKALLで検索して冊子体図書が自分の所属大学図書館で所蔵されていなくても、他大学から自館に無料で取り寄せる手続きをそのままオンラインで行うことができる。

最後の「資料の保管」について、JULACが進めているプロジェクトはJURA（Joint Universities Research Archive）という共同書庫の建設計画である（図9）。巨大な自動化書庫（計画では最大収容可能冊数995万冊）を香港政府に建設してもらって、利用がほとんどされなくなった冊子体資料を1部保管して、8大学で共有する。どこかの図書館が1部をJURAに収めたら、他の所蔵館はその資料を除籍してもよく、もし教員や学生がその資料の利用を希望した場合は、HKALLから請求すれば、JURAから出庫して請求者の所属大学図書館に送付するという運用をする予定である。現在このJURAの建設計画は政府の公共事業審査の段階で、認められて予算がつけば着工する予定である。なお、JURAの建設決定を待たずして、すでに8大学図書館間で製本雑誌の分担保存は始まっている。

JULACが図書館サービスのさまざまな側面で協力関係を推進できるのは、地理的にコンパクトに8大学が集中しているという利点だけでなく、それぞれの館のノウハウや人材、資料、資金を持ち寄ることで、単独館ではできないようなサービスを提供し、8大学全体で図書館の利便性を向上させようというライブラリアンたちの強い思いがあるからこそという印象を受けた。

筆者は、2014年の香港だけでなく、これまでもアメリカの複数の大学図書館の訪問やインターンシップの経験がある。このような経験を積み重ねるたび、やはり他の図書館を見て、そこで働く人と業務の話をすることで、新たな知見を得ることができると感じてきた。他館の取組みを見て、自館の状況と比較し、自館が足りないところはどう改善できるかを考えるきっかけにもなる。もちろん言語や文化の違いなどで全く参考にならないこともあるが、それはそれで異文化への理解が深まったと前向きに捉えることができる。

このようなことを、2015年12月に講師として招かれた大学図書館職員向けの研修で、国公私立大学図書館に勤務する若手職員に話して、日常業務に埋没するのではなく、自館の外にも目を向けるように奨励した。

[1] 嶋田有理香，魚住英子，山本祐実．『2014年度海外集合研修報告書』http：//www.jaspul.org/ind/asset/docs/shugo_report2014.pdf（オンラインアクセス 2015/12/16）

[2] 口頭発表の内容および投影したレジュメは、魚住英子，山本祐実，嶋田有理香．「2014年度海外集合研修報告」として『私立大学図書館協会報』145, 2016, p. 83-97に掲載されている。

[3] Times Higher Education, “World University Rankings 2015-2016”．https：//www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2016/world-ranking#!/page/0/length/25（オンラインアクセス 2015/12/16） ちなみに、このランキングで東京大学が前年の23位から43位にダウンしたのが話題となった。日本の大学は100位以内にあと京都大学（88位）が入っている。

[4] “Statistics：Collection（October 2015）”，The Hong Kong University of Science and Technology Library. http：//library.ust.hk/info/statistics/collection.html （オンラインアクセス 2015/12/23）

[5] 小山憲司．「利用者要求にもとづくコレクション構築：大学図書館における電子書籍を対象としたPDAを中心に」『カレントアウェアネス』313, 2012, CA1777, p. 18-21. http：//current.ndl.go.jp/ca1777（オンラインアクセス 2015/12/23）

[6] Kwak, C.S.Y., et.al. “Demand-driven Acquisition at HKUST Library：The New Normal.” *Interlending & Document Supply*, 42, 2014, p.153-158.［DOI：10/1108/ILDS-09-2014-0046］

[7] “Main Library Level 3”，The University of Hong Kong Libraries. http：//lib.hku.hk/level3.html（オンラインアクセス 2015/12/23）

[8] “Why READ@PolyU？”を筆者が日本語訳した。https：//www.lib.polyu.edu.hk/read/（オンラインアクセス 2015/12/23） なお、2015/16の指定図書は、*The Fault in Our Stars* というガンと闘う17歳の少女のロマンスを描いた小説で、展示やセミナーなどはガンに関するもののようである。

[9] JULACの諸活動に関する説明は、JULACの代表である香港大学図書館長のPeter Sidorko氏の講義とJULACのホームページに基づく。http：//www.julac.org/ （オンラインアクセス 2015/12/23）